

生活科教科主張

1. 生活科における学び

私たちは、身近な人、社会及び自然という対象を自分とのつながりで考え、自分や友達の見方・考え方を生かして、生活を豊かにしていこうとすることが生活科における学びと考える。

対象に出会った子どもはそれぞれのやり方で自ら対象と関わっていく。子どもは対象とくり返し関わる中で「もっと〇〇したい」と自分の思いをもち、先行経験や活動を通して得た見方や考え方を生かしながら、思いの実現に向かって主体的に活動する。その過程で、意識していないことが気付きとして自覚化されたり、一人ひとりの気付きが関連付けられて新たな気付きが生まれたりして、気付きの質が深まっていく。活動する中で満足感や達成感等を得た子どもは、次の活動や日々の生活への意欲や期待を高め、ひいては自分自身の成長を実感していく。

このような経験をくり返すことで、主体的に取り組んだり、今後やりたいことを吟味したり見つめ直したりしようとする原動力が生まれていく。そして自ら対象に働きかけていく中で、自分の見方・考え方を広げたり人との関わりを深めたりして、生活を豊かにしていくと考える。

2. 本校生活科部が考える『その子らしく学ぶ』

私たちは「その子の背景や、活動の中で生まれた見方・考え方をもとに、やりたいことを吟味したり見つめ直したりするなど試行錯誤をしながら思いの実現に向かうこと」を生活科における『その子らしく学ぶ』であると考えている。

まず、対象に出会った子どもは、「知りたい」「やってみたい」と興味をもち、自ら対象と関わっていく。そこには、その子の知識や先行経験、見方・考え方などが影響しているだろう。そして対象とくり返し関わることで、思いが生まれたり膨らんだりしながら、自分のやりたいことを明確にして、学んでいく。

自分と対象とを結びつける中で、子どもは自分を軸にして学びを進めていく。「もっと〇〇したい」と思いをもった子どもがその子ならではのやり方で対象と関わることで、その子ならではの気付きが生まれる。その気付きをもとに子どもはさらに対象と関わったり試行錯誤を重ねたりして、思いの実現に向かっていく。

自分の思いの実現に向かう中で、友達と気付きや考えを共有することもある。友達と「もっと〇〇したい」という思いを伝え合ったり高め合ったりして、その子の見方・考え方は広がっていくだろう。そして「自分が本当にやりたいことは何だろう」と吟味したり見つめ直したりして、その子がその時に働かせる見方・考え方が焦点化され思いの実現に向かっていく。

このようにして思いを明確にしながら、その実現に向けて気付きをていく子どもは、自分の見方・考え方を広げたり、深めたりして生活科の学びをゆたかにしていくだろう。

3. 『その子らしく学ぶ』子どもを支える環境設定

(1) 対象との魅力的な出会い

子どもにとって身近な人・もの・ことを対象として単元を構想する。また、子どもが「知りたい」「やってみたい」と思えるように、対象に触れたり、体験したりする場を設定する。

(2) 気付きの自覚化、高まりへとつなげる活動

同じ思いをもつ友達との活動や、多様な思いをもつ友達との活動など、自発的に協働する学習活動を支えていく。その中で新たな気付きが生まれたり、一人ひとりの気付きが関連付けられたりするように活動の歩みを視覚化する。

また、言葉や絵や動作、劇化等、子どもの思いに沿った多様な表現方法を取り入れていくことで、見つめ直す機会を設定し、子どもが気付きを自覚できるようにしていく。

(3) 子どもが思いを実現できる場や振り返りの場の工夫

子どもが、気付きから新たな思いや気付きにつなげられるように、いつでも思いをもって試したり対象にくり返し関わったりできる場を設定する。

振り返りの視点を明確に示すことや、写真や動画、感想等を提示することで、自分自身の成長に気付いていくことができるようになる。

(4) 「その子らしさ」をより深くとらえる教師

その子の「こうしたい」という伸びようとする芽をとらえることも、『その子らしく学ぶ』子どもの姿を生み出したり支えたりする上で大切なものであると考える。今見えている「その子らしさ」だけでなく、その子になりたいと思う姿をも教師が捉えることで、対象との出会いやその子が壁にぶつかったときの支え方を工夫することができるのでないか。